ぼくとはっかあめときみ

蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぼくとはっかあめときみ

【Ｎコード】
Ｎ３４５７Ｌ

【作者名】
蛙

【あらすじ】
ぼくは引きこもりだったけど１人暮らしを始めた。
子供を拾った。アパートの住人は変な人ばかりだった。
もう帰りたい。

ぼくとふどうさんやさん

僕は昔から変な奴に好かれやすかった。

小学校の頃も中学校も高校も、いつだって僕に寄ってくる奴は

勉強と部活の両立に悩んだりだとか素敵な異性に胸をときめかせ夜も眠れないだとか

テスト勉強してねーよやべぇ赤点だウけるだなんて会話を交わすような

そんな普通の人間ではなかった。

そんなやつらとつるんでいたため

当たり前のように小中高といじめられた。

靴箱にもやしがぎゅうぎゅうに詰め込んであったり

クラス全員が口裏をあわせ、犬派か猫派かという学校アンケートで僕を除く全員が「犬派」と答えたり

僕の音楽の教科書をお経の本にすりかえるなど

陰湿かつクオリティの高いいじめのせいで

ぼくは中学校から本格的に家にひきこもった。

しかし厳格な父親は僕を社会に送り込むために
まさかの大学に通いながらの１人暮らしを共用した。
ドラキュラの口に聖水と十字架とにんにくをつめこんで日向に出す
ような暴挙である。

「うん、じゃあココにサインして」

「あ、はい。」

僕はボールペンを取り、名前の欄に１９年間付き合ってきた自分の
名前を書く。

「・・・・・何か？」

不動産屋の男性が僕の左手へ熱い視線を送っている。

「変わった名前だねぇ」

「そうですか？」

何だ、名前欄か。

「うん。入学式で前の列の奴にも振り向かれるくらいだよ」

入学式の緊張を押しのけてでも！？

僕はボールペンを机に置いた。

「はい、ありがとう。・・・へぇ、榊原大学ねぇ～いいとこじゃん。頭良いの？」

「マークシートが3択だったのと鉛筆が六角形だった時点で僕の合格はきまってたんですよ。」

「鉛筆転がしたのかよ・・・ふーん」

不動産屋さんは真剣な顔をして僕を見た。

「でさぁ、君このアパートがどんなところか知ってるの？」

「？駅から歩いて１５分。２ＬＤＫ。家具家電付き。１回が大家さんの経営するレストランになっているために三食賄い付き。」

「辞書のような説明をどうもありがとう。で？何か変じゃない？」

「別に？」

「・・・家賃は？」

「４万」

「・・・安いと思わないかい」

「だからきめたんですけど」

「へぇ。ワケわりとか思わなかったんだ？」

「自殺とか事件とかあったんですか」

「いいや・・・ソレは一切ないよ。保証する。ただ大家さんが物好きでね。」

「物好き・・・」

「住人が飛びぬけて変な奴ばっかりなんだ。普通の奴なんていないと考えていい。
ここに住む場合は君は大学でも変な奴と付き合わないといけないのさ。」

「な・・・なんだって・・・」

そこで僕はあるおかしな点に気づいた。

「・・・「大学も？」何故僕が今まで変な奴としか付き合ったことが無いと知ってるんですか・・・？
あなた一体、」

「さっきなんか自分でぶつぶついってただろう。僕は昔から～・・・とか」

「なんだそうか。疑ってすみません」

「君も大概変な奴だね・・・じゃあ大丈夫かな。引越しの方は手続きしとくから。」

そういって不動産屋さんは立ち上がった。

まぁ小学校から変な奴に付き合ってきた僕だ。

今更どんな変な奴が来ても大体仲良くやっていけるだろう。

大丈夫大丈夫。

「じゃあおねがいします」

そういって僕は不動産屋を後にした。

「・・・・大丈夫かなぁ・・・・あの子・・・・」

その後姿を、不動産屋さんは心配そうに見送った。

ぼくとおおやさん

次の日、僕は不動産屋さんから書いてもらった地図を片手にアパートへ向かった。

大学の手続きだの何だので忙しかったからアパートの下見はしていない。

まぁ住人が変な奴でもそりが合わなかったら無視すれば良いのだ。

「おお」

結局駅から３０分くらいかかった。

あの長身の不動産屋の歩幅で１５分なのか。いい加減にもほどがある。

しかしアパートのほうは予想以上に豪華なもので

１階は小奇麗なレストランになっていて

まだ準備中なのか、白地に緑色の文字で「ＣＬＯＳＥ」とかかれた木製のプレートがドアにかかっていた。

１部分がガラス張りになっている壁から中を見ると

茶色と白を使ったシンプルな内装で

４人がけのテーブルが５つある。

「ええ・・・」

明らかに家賃と部屋が反比例している。

まさか1ヶ月に1人食材にされるとかじゃ・・・

僕は比較的細身だ。

生ハムかジャーキーぐらいにしか使えない

レパートリーの少ない男だと思われて追い出されたりとかしないだろうな。

「何やってんの」

びくっと自分の肩がはねる。

「あ」

とっさに声が出ない。

「あんた・・・・」

「すっ・・・すみません！ごめんなさい！」

「はぁ？」

そこに立っていたのは女性だった。
多分年は僕より年上であろう、２０代か３０代くらい。
つややかな黒髪を１つでくくっている。
整った顔立ちをしていて、モデル並みのプロポーション。
なんだこの完璧な人結婚しようハネムーンはハワイに行こうとか思っていると
彼女の方から口を開いた。
「あぁ、あんたは新しく引っ越してきた奴か」
「あ、はい」
「なんだ全然似て無いじゃんよ。あいつの絵心のなさは相変わらずだな」
「え？」
女性はズボンのポケットから1枚の紙を取り出した。
クワガタにどんぐりを突き刺し、それを虫が喰ったような絵が描いてあった。
「　不動産屋(あいつ)が描いた君だ。」
「彼は耳で鉛筆持ってるんですか？」

「たしか右利き。」

「右耳ですか」

「数年前は右手で書いてたけど今はどうかな」

彼女はくっくと笑って言った。

「私がこのアパートの大家。大家の大谷みゆき（おおやみゆき）。よろしくね青年。」

「おっ・・・大家！？あなたが？」

「ん？大谷家を知ってるの？もしかして君と私は親戚だったりする？」

「いや、違うそっちじゃなくてこっちのおおやに驚いてるわけでして」

「ややこしいわボケ！」

大人のそういう理不尽な叱責が子供を非行に走らせるんだ！

「ところであんたこのアパートがどんな場所か知ってんの？」

「え？ああ、変な人たちばかりと聞きました」

「ふーん」

あいつまだ言うつもり無いんだ

「え？」

大家さんが何か言った気がしたけど

よく聞こえなかった。

「ううん！なんでもない！じゃあ今日からあんたもココの住人よ！ほーらさっさとお部屋に行きなさいよ！はいコレあんたの部屋の鍵！」

ぽいと無造作に投げられたのは銀色のぴかぴかの鍵だった。

「３０２・・・」

「はい。そこの階段上がってね。きっとみんなあんたのこと歓迎するわ！」

「あ、はい」

なんだかよく分からないけどいい人だ！

僕は大家さんに背中を押され、

階段を駆け上がった。

ぼくときみ。（前編）

僕は３階まで階段を上った。

「３０２か・・・えっと」

僕は３０２号室の扉を開ける。

「おお・・・広い」

僕は靴を脱ぎ、さっそく部屋に入った。

和室と洋室があり、きちんと洗濯機やクローゼットなどの家具家電もついている。

風呂も着いているしトイレはウォシュレットもついている。

やっぱりこれで４万円は怪しいなぁ。

ダン

「！？」

隣の部屋からすごい音がした。

そういえば住人は変な人ばかりって言ってたなぁ

柔道でもやってんのかな。

趣味でモンゴル相撲とかロッククライミングとかやってたり・・・

「せやっ！」

ガシャアアン

「・・・・・・」

夜中とかにコレないだろうな。

僕は夜１０時に寝て５時におきる引きこもりにあるまじき規則正しい生活を送っているのだ。

モンゴル相撲だろうがロッククライミングだろうがエクストリームスポーツをするのは

隣人の趣味だろうが

僕の安眠妨害だけは勘弁して欲しい。

・・・・・

ただ僕はいくら規則正しい生活をしていようが元ひきこもり。

しかもイジメによるものである。

対人恐怖症というものを抱えている僕は隣の人を見に行くなどという勇気はわいてこなかった。

「はぁ・・・・」

僕は自分に失望した。

こういうことは勇気が出るまでまとう。

勇気など時の流れに任せ、いつか沸いて出るはずだ。

・・・毛穴とかから。

「おい新人」

「ぎゃあっ」

「・・・ずいぶんとかわいい声だすじゃないのよ」

大家さんだった。

いつの間にか扉のところに立っていた。

「ははははい！何でしょうか！」

大家さんは人差し指でくいっと下を指差した。

「荷物。着てるよ」

「あっ」

大きなトラックには、黄緑色の太字で「かっぱ運送」とかかれ、その横には

頭の皿を太陽の下にさらけ出した命知らずのカッパのキャラクターがウインクし、

親指を立てている絵が描かれている。

運送屋は2人組みで

2人とも緑色の作業着を着て帽子を深くかぶっているため、顔は良く見えない。

しかも全然しゃべらない。

大きなトラックなのに降ろされたダンボールは3つで、なんだか申し訳ない気持ちになった。

「おつかれさまです・・・」

僕はお礼くらいは言わねばと思い、思い切って声をかけたが

2人はぺこりと頭を下げただけだった。

「ご利用ありがとうございました」

抑揚も感情も無い声、しかし透き通る声で運送屋の1人が言った。

中性的な声で、やはり女か男か分からなかった。

それにあわせ、もう1人は僕に頭を下げる。

「あ、はい」

僕はおどおどと頭を下げた。

2人はトラックに乗って帰った。

「・・・・」

緊張した・・・・

それじゃあ片づけをしよう。

「・・あれ？」

そういえば・・・ダンボールって3つもあったっけ？

母さんが食べ物でもいっしょに送ってくれたのかな？

僕はガムテープを1つはがす。

中にはバスタオルや洋服などが入っていた。
２つ目のダンボールには、パソコンや本などが入っていた。
「・・・・・？」
家でつめたものはコレで全部のはずだ。
漫画やゲームはほぼ処分したし、家具家電は必要ない。
僕は３つ目のダンボールを開けた。
女の子が入っていた。

ぼくときみ。（後半）

どうしよう！どうしようこれ！

プルルルルルル

「ひっ」

電話が鳴っていた。

おんなのこがこちらを見つめている。

「ちょっと待ってて」

僕は急いで電話をとる。内線の電話だった。

「はい」

「おおあたしあたし」

大家さんだ。

「下に降りといで。ごはんだよ」

「あ、はいありがとうございます」

「あんたのこと紹介したい奴らもいるしね。できるだけ早くおいで」

僕は電話をきった。

「・・・・・・」

ダンボールの中を覗き込む。

女の子の大きなきらきらした瞳が僕を捕らえて放さない。

おんなのこは４歳が５歳といった所で

首の辺りで切りそろえられたさらさらの髪の毛はすこし茶色みがかかっている。

肌が絹のようで白い。

美少女やんけ。

じっとみつめると少女も僕を見詰め返す。

かわいい。

ロリコンの気持ちが分かる。

「とりあえず大家さんに・・・・」

はっとした。

ロリコン・・・

もしかしたら僕、ロリコンに間違えられたりしないか？

もしくは誘拐犯とか・・・

くるっと少女の方を見た。

「・・・・」

黙っていた方がいいかもしれない。

「ごはん持ってきてあげるね」

僕が言うと少女はこくんと頷いた

「いい子にしててね。すぐに戻ってくるから」

少女はまたこくんと頷いた。

ぼくとしなのくん。

「おお！来たね！」

「は・・・はい」

僕はおどおどと返事をし、大家さんが指した席に座った。

テーブルには今まで見たことのないような豪華な食事がたくさんのっていた。

すでに住人と見られる人たちも４人座っていた。

「よし！全員揃ったね。まぁ本当はもっと住人もいるよ。みんなにあんたを紹介したかったんだけど
あいにく都合が合わなくてね・・・。今日は４人しか集まらなかった。ごめんね。」

申し訳なさそうに微笑む大家さんも美人だ。

「い、いえいえ！そんな！別に気にしませんから！」

「そうか・・・？それならいいけど。じゃあ自己紹介しようか。」

大家さんは僕の方を見た。

「じゃあ私からね。私は・・・まぁさっきも言ったんだけど大谷みゆき《おおやみゆき》。
ここの大家やってます。あとここのオーナーもやってるよ！

大家で大谷でオーナーだからややこしいけどよろしくね！」

「こ・・・こちらこそ」

本当にややこしいが「おおやさん」と呼べば大家さんも大谷さんも同じだ。

「じゃあ次！信濃！」

僕は右の席を見た。

ぎょっとした。

短い金髪。

大量のピアス。

短めの学ラン。

鋭いつり目。

足を組んでテーブルに乗せる。

不良だ！

ヤンキーだ！

僕の顔を冷や汗が伝う。

僕を昔いじめていたのもヤンキーが中心だったので

僕はこういう人たちがすごく苦手だ！無理だ！

できれば僕の存在をアウトオブ眼中してほしい。

さっきのドタバタ言ってた隣の人はもしかしたらこの人じゃないか？

隣の高校のヤンキー１００人斬りみたいな？

いや、あの部屋に１００人は無理か

「・・・・・オイ」

びくっと肩が跳ねた。

この威圧感バリバリの低音は隣のヤンキー君から発せられたものだろう。

「・・・はい！？・・・なんでしょう？」

いままでに無いような笑顔をしてみた。情けない。

「・・・・あんた大学生か」

「えっ、は、はい」

「年上かよ！！！」

ガシャンとテーブルから足が下ろされる。

「とっ年上ですみません！！！」
「すみません！！！」
「・・・・・は？」
今、威圧感のある低音が僕のよく考えたらしなくてもいい謝罪に重ならなかったか？
「年上だったんスね・・・早く言ってくださいよ。生意気な口きいてすみません」
「・・・え、え？」
今の威圧感の（中略）は君かい？
「俺は信濃（しなの）っていいます。高校行きながらバイトして一人暮らしやってます。」
ご丁寧に頭まで下げられた。
「は、はぁ」
「信濃は不良だけど礼儀正しいんだ。いい奴だよ。」
じゃあなんで不良やってるんだよあとテーブルに足を乗せていたのは何・・・・
下を見るとあることに気がついた。
「し、信濃さん・・・・」

「信濃でいいっすよ」

「あ、いやじゃあ信濃君・・・・」

「ハイ」

「足すごく長いね・・・・」

信濃君は椅子に浅く座り、足を若干曲げていた。

「あー不便なんですよねーかっこいいとか言われてもあんまり嬉しくないし」

うらやましい。

あ、だからテーブルに足を・・・・

「い、椅子を変えてもらえばいいんじゃ・・・」

僕が言うと

「まぁそれを言ったんだけどね」

と大家さんが困ったように笑った。

「いや、お店の椅子が一個だけ高いって変でしょ。お客さんが不便だろうし。

俺が我慢するだけでいいんッス」

この子天使だ・・・・！

あ、でもこんなに耳にピアスした天使は嫌だ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3457l/

ぼくとはっかあめときみ

2010年10月14日16時45分発行